英語の授業における生徒のコミュニケーションを促す方策

石津　恵陸ウイクス
教科領域コース

１．はじめに

平成 20 年度改訂の学習指導要領(文部科学省, 2017, p5)では、「語や文化に対する理解を深め, 積極的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度」「考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする力」の育成を目指した。しかし平成 29 年度改訂の学習指導要領(文部科学省)では、それまでの学習内容や指導方法等を発展的に生かせていないこと、文法・語彙等の知識の習得に重点が置かれていること、外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した言語活動が十分ではないことなどを反省点としてあげている。そこで新たに、互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合う対話的な言語活動を重視することが盛り込まれた。

２．リサーチ・クエスチョン

本実践は筆者の研究テーマ「英語の授業における生徒のコミュニケーションを促す方策」を基に以下の２つのリサーチ・クエスチョン(RQ)を設定した。RQ1 は「ペア活動でやり取りを継続することで生徒の発話にはどのような変化が生じるか。また、生徒よりも英語上級者である教師とのやり取りとどのような違いがあるのだろうか。」とした。RQ2 は「トライアド(３人組)でのディスカッション活動を複数回行うことで、生徒が行うやり取りの内容や発話語数はどのように変化するか。」として実践を行った。

３．授業実践

茨城大学教育学部附属中学校の第２学年の 144 名を対象にした今回の実践では、話すこと（やり取り）を中心とし、生徒同士が英語でコミュニケーションを取る活動として「１分間チャット」と「３人組(トライアド)によるディスカッション」の 2 種類を行った。また実践においては、①即興であること、②話題が日常的なものであること、③質疑応答があること、④社会的な話題を扱うこと、⑤自らの意見を持ち、その理由を伝えられることの５つを目標とした。

実践の１つ目である「１分間チャット」は英語によるやり取りの練習として、毎授業の挨拶後に帯活動として、３ヶ月間 30 回ほど行った。ペアで自身の考えや体験、感想等を伝え合う活動で、話題として“What did you do on this weekend?”, “What do you want for Christmas?”, など時事に合わせたものや、*New Horizon 2* ,Unit 6 “Research your Topic”（東京書籍[HS1]）の内容である「好きな映画」に話題を合わせ、“What is your favorite move?” や “What movie did you recently watch?” など授業の導入としての役割を持たせたものなどで行った。ペアでの活動後にどんなことを話したのかを教師が確認するため、ランダムに選んだペア１組と授業者による活動の振り返りとして生徒教師間でのやり取りの時間を設けた。

実践の２つ目である「ディスカッション」では３人組でその日のテーマについて意見を出し合い、話し合ってグループで最終的な一つの意見をまとめるというものである。本実践のディスカ

ッションは３人組（トライアド）で行うことを基本として設定した。その理由として、齋藤（印刷中）が述べる２つの理由を根拠としている。まず１つ目に「３人組は一人一人の話す機会が４人組よりも多い」ということである。これは、人数が少ない分、話題に入る機会と話す機会が得やすいと考えられるからである。次に２つ目の理由として「３人組は個々の責任が４人組よりも大きい」ことである。４人組またはそれ以上の人数でのグループワークでは役割の小さい人、または無い人が生まれる可能性や、グループワークに貢献しなくても活動が進んでしまう可能性がある。それに比べ、３人組では各自の役割が大きく、グループの活動に必然性を持たせることができると考えられる。本実践では全６回で活動を行った。トピックとしては、「ブリティッシュ・ヒルズ（以下 BH）英語研修（宿泊学習）を経験して、後輩にアドバイスをする」「自分の学校で改革したいこと。「観光してみたい国」「ヴェネチアのオーバーツーリズムについてどう考えるか」など生徒にとって身近なトピックから、社会的なトピックの両方を設定した。本実践では全６回で活動を行った。トピックとしては、「ブリティッシュ・ヒルズ英語研修（宿泊学習）を経験して、後輩にアドバイスをする」「自分の学校で改革したいこと。「観光してみたい国」「ヴェネチアのオーバーツーリズムについてどう考えるか」など生徒にとって身近なトピックから、社会的なトピックの両方を設定した。ディスカッション活動は４つのステップで構成した。ステップ１では、その日の話題に対して自分の考えをそれぞれ日本語で書き出すことを行う。ステップ２では、ステップ１で書き出した日本語の意見をもとに日本語でディスカッション（意見交換）を行う。この目的としては、この後に行う英語でのディスカッションのリハーサルを兼ねている（齋藤,印刷中[HS2]）。あらかじめ、話す内容をお互いに理解しておくことで、英語でのディッション時に会話内容の理解を円滑することをねらっている。ステップ３では、ステップ２で行った日本語ディスカッションを基に、「英語で言えなそうな表現」や「知らない単語」を調べる時間を設けた。生徒の作った英文は文法的な間違いや、語彙選択の間違いはあるが理解は可能なものが多い印象である。

４．結果と考察[HS3]

１分間チャットでは、RQ1 の「ペア活動でやり取りを継続することで生徒の発話にはどのような変化が生じるか。また、生徒よりも英語上級者である教師とのやり取りとどのような違いがあるのだろうか」について、話者のレベルにもよるが、生徒間と生徒教師間では語数はあまり変化がないことがわかった。これは授業者側からのフィードバックが少なかったことが要因として考えられる。しかしながら、一方で質問を工夫すれば、その話題の詳細について会話を膨らませることが可能であり、ある程度のやり取りができるということがわかった。[HS4]実際に生徒より上級者である教師とのやり取りでは、授業者側からの質問内容を理解し、それにきちんと応答するという様子が見られた。このことから、生徒の言語レベル（現状の能力）よりも上の者との会話を続けることで、より深い内容で会話が行えるのではないかと考えた。そこで、内容についてさらに質問をする練習やその例を示すことで、より内容のあるチャットが可能になるのではないかと考えた。この環境を授業で作り出す一つの方策として、ネイティブスピーカーや教師との、意味あるやり取りをする経験を増やすことが必要であろう。

全６回のディスカッション活動では生徒が行うやり取りにはある程度の変化が見られた。RQ2「トライアド(３人組)でのディスカッション活動を複数回行うことで、生徒が行うやり取り

の内容や発話語数はどのように変化するか」に対しては、ディスカッションでは実際に生徒の発話した語数は増加し、その内容も話題を問わず、意味のあるやり取りが行われていることが確認できた。“Why?” や “How” など疑問詞を用いて理由や方法など聞き出そうとしている様子が見られた。活動の初期段階では一人一人が準備した意見を発表するというのを３回繰り返すというディスカッションが多かった。しかし回数を重ねるごとに、意見に対して理由を聞いたり、自身がそれに賛成か反対かを述べたりするようになっている。またメンバーが異なっているので、単純な比較はできないが、各トライアドの発話数も増えていることがわかった。これは、発話する前の準備に時間をかけることが、ディスカッションの活動に意味を持たせ、長い時間生徒がやり取りをする環境を作り出したと考えられる。

表１　ディスカッション活動での生徒の発話語数の変化

グループ	第 1 時（BH での後輩へのアドバイス）	第 6 時（ヴェネツィアの観光公害）
A	58 words	86 words
B	46 words	59 words
C	54 words	93 words
D	113 words	125 rds

５．まとめと反省

２つの実践を通して見えた反省点が３つある。１つ目は、活動後に教師側からのフィードバックが少ないことである。２つ目は、言いたいことがあるが言えない状況において、どうのように授業者側が対応するかという点である。最後に意見や自らの考えが持てない生徒への手立てである。それぞれの課題に対し、今後改善策を講じていく必要があるだろう。

本実践では「話すこと（やり取り）」を中心とした活動を行い、ペア活動では話題を膨らませるために必要な会話の要素、ディスカッションではやり取りを意味のある活動にするための準備の重要性に気づくことができた。また、実際に生徒が話す英語を聞くことで、生徒ができること、苦手なこと、今はできないことなどを発見することができた。このことを踏まえ、指導を工夫することが大切だと思う。私は実際に英語を話すことが、英語を習得するための近道だと考えている。今後も、話すこと(やり取り)を中心に、生徒が自ら英語を使ってコミュニケーションを取り合う授業を目指していきたい。

参考文献

齋藤英敏 (編・著) (印刷中) 『はじめよう　英語グループ・ディスカッション』大修館書店

笹島準一ほか (2021) New Horizon 2 ,Unit 6 “Research your Topic” 東京書籍

文部科学省 (2017)『中学校学習指導要領（平成２９年告示）解説 外国語編』